

上野義雄（2015年度日本英語学会賞（著書）受賞）

このたびは、2015年度日本英語学会賞（著書）を賜りまして、大きな驚きを感じておりますと同時に、大変うれしくまた光栄なことと存じております。審査員としてお忙しい中丁寧にお読みくださった先生方や事務局の先生方に心より厚く御礼申し上げます。

今回の受賞対象に選んでいただいた拙著 *An Automodular View of English Grammar* は、2014年6月に早稲田大学学術叢書の第35巻として早稲田大学出版部より上梓しました。

その内容は、2012年に Cambridge University Press から出た恩師 Jerrold M. Sadock の *The Modular Architecture of Grammar* で展開されている Automodular Grammar (AMG) (Autolexical Syntax と呼ばれています)に基づき、筆者独自の分析を交えながら英語文法構造の主要な部分の分析、すなわちこれまで生成文法で議論されてきた主要な統語現象の分析を AMG の観点から提示したものです。（なお、柚原一郎氏による Sadock 2012 の書評が *English Linguistics* 31: 297-311 にあります。）

AMG の特徴は、文法は（2つの意味モジュールを含む）いくつかの独立したモジュールから構成され、各モジュールがそれぞれ句構造文法から成り、従来「変形」などを用いて説明されてきた現象はすべてモジュール間のミスマッチと相互作用で説明されると主張する点にあります。拙著では、そのモジュール間のインターフェースとしてレキシコンがきわめて大きな役割を果たしています。したがって、この基本的な認識や分析の道具立ての点で、GPSG、HPSG、LFG、*Simpler Syntax* などと多くの共通点があります。語彙項目を脳の長期記憶に保持されている言語情報と広く捉え、熟語や構文、形態素なども通常の語彙項目とともに、同様な形式でレキシコンに登録されていると見なしています。

執筆に当たっては、もう一人の恩師である故 James D. McCawley から学生時代に受けた2つの助言が常に念頭にありました。一つ目は、いくつかの統語理論を学んでその問題意識の持ち方や分析の手法やらを経験して視野を広げるようにせよと、二つ目は、ひとたび自分のアプローチを決めたら、それをできるだけ広範囲なデータに首尾一貫して徹底的に適用してみよ、というものでした。結果として、拙著で用いた分析の手法はかなり折衷的で、Sadock 2012 はもちろんのこと、McCawley 1993, 1998 や GPSG、HPSG、LFG、*Simpler Syntax* の影響が随所に見られます。たとえば、拙著で採用した（表層）統語構造と F/A 構造はそれぞれ McCawley 1998 と McCawley 1993 に基づいています。

ここに提示した文法の枠組みには、まだ十分に整備されていない箇所やさらに工夫を要する箇所などがあるかと残っております。このたびの受賞を励みとして、今後はこの枠組みで日本語の形態論・統語論を含むさらに広範囲なデータを扱いながら、記述力・説明力の高いさらに洗練された枠組みを目指して研鑽を積んでまいりたいと思っております。なお、拙著で得られた成果を土台にしたその応用編に相当する *An Automodular View of Ellipsis* を早稲田大学出版部より今年5月に上梓しました。

最後になりましたが、いつも励ましてくださるシカゴ大学言語学科の同窓生や筆者がゼミ聴講や御著書を通して長い間いろいろとお教えいただいている先生方、特に恩師のセイドック先生と故マコーレー先生には、この場をお借りして改めて感謝申し上げます。

このたびは、ほんとうにありがとうございました。